

天竜川上流域・辰野町における水系と集落立地

土本俊和・松田真一・藤ヶ谷さやこ・寺田茜

信州大学工学部

Water system and village location in the upper Tenryu valley and Tatsuno town

Toshikazu TSUCHIMOTO, Shinichi MATSUDA,

Sayako FUJIGAYA, Akane TERADA

Faculty of Engineering Shinshu University

Keywords : Tatsuno, the Tenryu river, drinking water, waterway

辰野町、天竜川、飲み水、水路

1. はじめに

地域計画・まちづくりを考えていく上で、地域に固有な資源の積極的な保全・活用や人間と自然との共存などは、近年になって改めて見つめ直されていることである。自然との共存を考えた場合、多くのものが考えられる。その中において「水」は集落形成において必要不可欠なものであった。その水質を管理して、清潔な水を得るために様々な工夫がなされたものと考えられる。ここでは天竜川流域の辰野町において集落と水系の視点から研究の概略を報告する。

2. 研究の進行状況と成果

2-1. 研究方法

絵地図・文献などからかつての集落と水利を分析し、また都市計画図 1:2500 により現状の水路の位置と集落の様子を現地調査から分析した。

2-2. 辰野町の集落の形成過程

現在辰野町・竜東において上平出・平出・上野・鴻の田・沢底・赤羽・樋口・山寺といった集落が形成されている。これらの集落がいつ形成されたのかの概略を文献史料と絵地図から把握した。早くその名を確認できるのは承久年間(1219-1221)の平出である¹⁾。その後、中世末期においては地侍によって開拓が行われたとされる²⁾。集落を行政単位として考えられるのは太閤検地が行われた頃からであろう。その頃、佐そこ・平出・樋口の村名が確認されるが、赤羽の名は確認されない。赤羽はその石高が沢底に含まれているため、当時はまだ独立した村ではなかったものと考えられる。赤羽が独立した村になったのは近世に入る少し前であろう³⁾。江戸期になり、人口の増加や耕地の

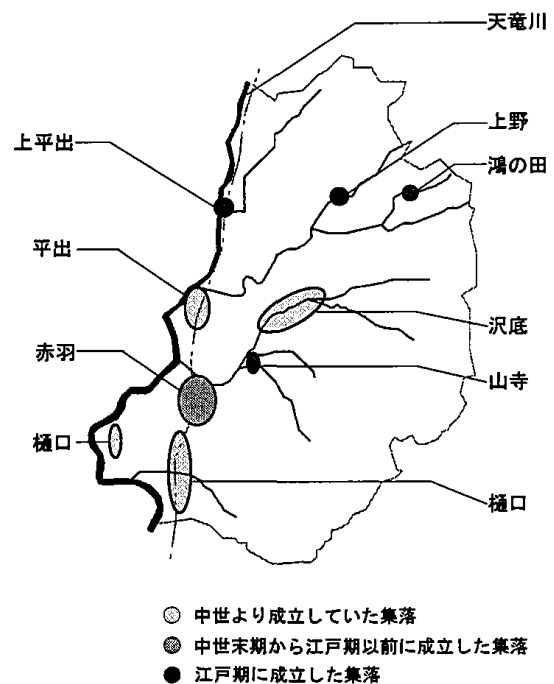


図1 辰野町の集落の位置と成立時代

拡大に伴い、新たに集落が形成された。いわゆる新田集落である。新田開拓の始まりは、上野が寛永5年(1628)、鴻の田が正保3年(1646)、岩花が元禄4年(1691)であった。この他、「新田」と名のついた支村として、川子沢・山寺・上平出が確認される⁴⁾。

以上の集落は、河川の上流および湧水の出る地域に成立している。これは、清涼な水を得やすい場所に形成されたと考えられる。つまり、清涼な水を得ることは集落にとって、一つの重要な要素であったと考えられる。

2-3. 取水について

水源として考えられるのは湧水・河川・井戸で

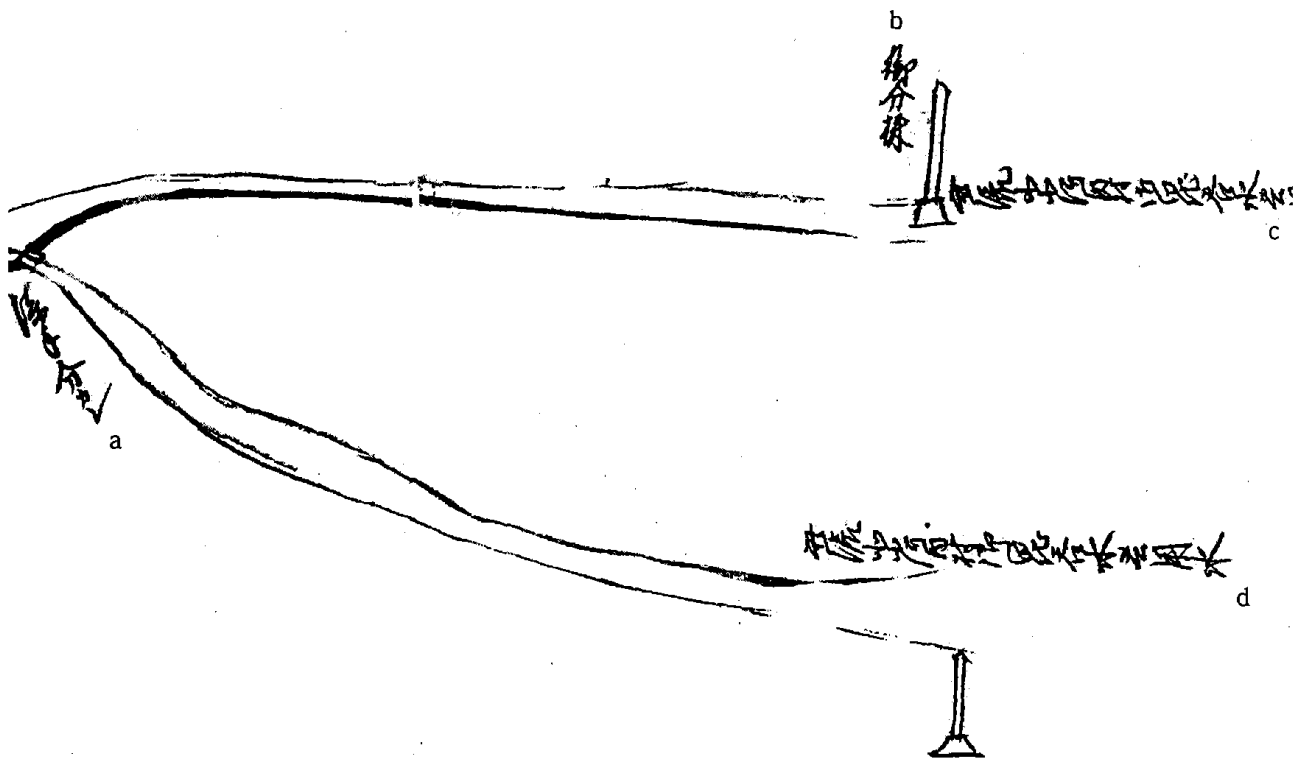


表1 各集落の河川と幹線水路

集落名	河川名	幹線水路名	幹線水路の水源
上平出	前沢川	上井筋 (現東天竜)	天竜川
平出	上野川	上井筋 (現東天竜), 下井筋	天竜川
鴻の田	上野川	上野川	上野川
上野	上野川	上野川	上野川
沢底	沢底川	沢底川から引かれた水路	沢底川
山寺	沢底川	沢底川	沢底川
赤羽	沢底川	山崎井 (現東天竜)	沢底川
樋口東割	樋の沢川	原田井	天竜川
樋口西割	樋の沢川	樋の沢川, 東天竜	天竜川・樋の沢川

ある。辰野町で湧水が確認できた集落は、平出・上平出・沢底であった。河川が確認できたのは、すべての集落であった(表1)。今回、井戸を確認していないものの、この地域における、上下水道の整備が行われる以前の主な取水源は、湧水ないし河川であったと考えられる。とりわけ河川水は不可欠な用水であった。

2-4. 井筋の掘削・堤の形成

辰野町は水田耕作を主として行ってきた地域であった。そのため、豊富な「水」を得るために先人は、井筋を掘削したり、堤を造ったりした。井筋は人工的な河川であり、堤は人工的な溜池である。史料によると、井筋は、そのほとんどが中世に掘削されたものであるが、近世に掘削されたものもある⁵⁾。「元禄検地帳」をみると上々田・上田が天竜川から引かれた井筋沿いに多く分布していたとさ

翻刻

- a 「流水分カレ」
- b 「御分棟」
- c 「北小河内村御口飲水共用水」
- d 「北小河内村御口飲水共用水」

* 翻刻不能の文字は□で示す

図2-1 「東井筋幅切底底堀等普請願図面」

れ、この地域に天明年間と安政年間の二度にわたり上井筋の掘削が行われることにより、この土地に安定的な水の供給が実現されるに至った⁶⁾。

井筋の掘削により田が広がったが、水利が不便な地域では、堤を造り、水を貯めた。

2-5. 水利・水質管理

2-3・2-4 でみたように辰野町は河川水を主な水源としていたと考えられるため、その水質管理は重要なことであった。史料によると、近世に河川や井筋はたびたび氾濫を起こしたようである⁷⁾。井筋の川除の際にはその井筋を使用する村々および竜西の村々から人々が集められた⁸⁾。上井筋では年に一回の「堰干し」なども行われた⁹⁾。

また、井筋の利用に際し、規約が設けられた。洗濯水は流さない、鍋釜の墨、食器の残りを捨てぬ事、肥糞類を水路に入れぬ事、自分の敷地付近は常に清潔に保つ事、などである¹⁰⁾。また、元治

元年（1864）の「東井筋幅切広底堀等普請願図面」¹¹⁾を確認すれば、「此流北小河内村御口飲水共用水」という記述をみることができ（図2-1）。この記述から、用水ばかりでなく飲み水としても河川水を活用していたことが文献的に実証された。北小河内村は上井筋の下流に位置していることから、先述した井筋の利用規約は下流に位置する集落においても重要なものであった。井筋のなかには「使い川」と称されて、その水路沿いには洗い場等が設けられたりもした¹²⁾。

天竜川の支流のごく近くに位置する上野では上野川を、山寺では沢底川を活用していた。ここでは、井筋に頼るよりむしろ朝早くに河川から水を運び、水樋を満たすことにより、水を確保していた。つまり、清潔で豊富な水を得ることが生活の基盤であったと考えることができる。

現状においても各家庭に池をつくったり、山からの水を「沢水」といって農具を洗ったり、畑などに活用されている。

2-6. 流水経路の特徴

現況調査から井筋の流水経路と集落との関係进行分析した。その際、以下の視点を用いた。

I 幹線水路→水源から用水を圃場に導く水路

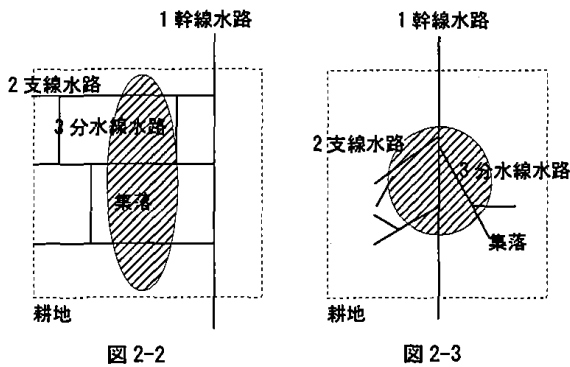


図 2-2

図 2-3

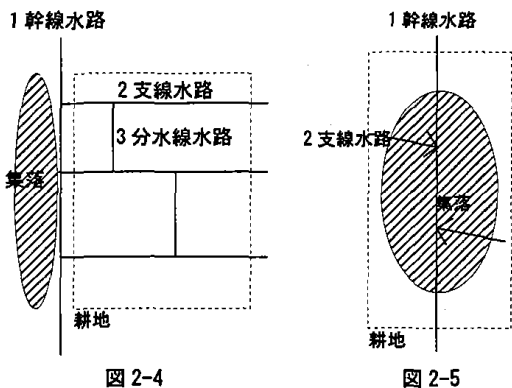


図 2-4

図 2-5

II 支線水路→幹線水路から分岐された水路

III 分水線水路→支線水路から分水されたもの

以前より岡谷街道に面して立地していた集落（平出・上平出・樋口東割）では、集落より高い段丘の上に集落の基軸に対して平行に幹線水路を引き、そこから集落に対して数本の支線水路を引き込み、その支線水路から各住居に分水線水路が引き込まれる形態をとっている（図2-1）。また、赤羽と樋口西割では、集落のなかに直線的に幹線水路を引き込み、その水路から数本の水路を引くという形態をとる（図2-2）。沢底では、河川から幹線水路を引いて、その水路が集落と耕地の間を流れる（図2-3）。沢底は河川より高く位置しているため、取水源はそのるか上流にある。史料によると、かつて沢底川が多くの氾濫を起こしていることから、その災害を避けたために、このような立地になったと考えられる¹³⁾。新田開発によって形成された集落のうち、上野・山寺・鴻の田は同様に山間に位置しているが、沢底とは対照的に、道に沿って河川が流れ、集落は道と河川とを中心に立地している（図2-4）。

「幹線水路」→「支線水路」→「分水線水路」の流れが集落にいかに関わり込んでいるのかを模式図として以下に表す。

3. 各集落における水路の特徴

上平出・平出・樋口について、幹線水路である上井筋から流れる支線水路をみる。平出では支線水路 19 本のうち 16 本が岡谷街道に対して直角に配された道に沿っている。また、上平出では支線水路 10 本のうち 9 本が、樋口では支線水路 13 本のうち 12 本が街道に対して直角に配された道に沿っている。この支線水路は天竜川へ流れ込んでいるため、これら三つの集落は、岡谷街道を軸とした形態が類似しているといえよう。

赤羽・樋口西割では、水路はあらゆる方向へと引かれる。

また、沢底では、幹線水路よりも住居が高い位置に立地している点が注目される。

さらにまた、開発によって形成された集落では河川が集落を貫くように流れる。支線水路は耕地の方に流れているが、集落の方には流れていない。ここでは、水道の整備前は、山から流れ出た沢水および井戸によって生活用水を補っていた。河川と住宅との距離が近いので、直接河川水を引いて

くる必要性が低かったと考える。とくに、上野や山寺では河川水を汲みにいていたことが文献とヒアリングから確認できた。

4. まとめ

水循環の観点からみた場合、天竜川から取水した水系が重要である。というのも、集落や耕地にはりめぐらされた水路は、再び天竜川に水を戻すからである。上水道が普及する以前、この水系の水は、用水ばかりではなく、飲み水としても利用されていた。

かたや、地下水を利用した湧水や井水があり、また、山から落ちてきた沢水を直接利用する姿もみられた。

これらの水は、生命の根幹を支える飲み水であり、日常生活のための用水であり、農業用水であった。河川や湧水を取水源としつつ、井筋の掘削などを通じて、人工的な水路をネットワーク状に配することで、集落の立地と密接に関わりながら、これらの水は絶えず供給され続けてきたといえる。

歴史的に形成されてきた社会的共通資本ともいえる水系と集落立地について、その成立過程と現状の実態と未来への価値を、環境を考慮したこれからの地域計画やまちづくりのために、今後、より詳しく明るみにする必要がある。

【註】

- 1) 朝日村刊行委員会『朝日村史』（朝日村史刊行委員会、1968）85頁
- 2) 前掲『朝日村史』86頁
- 3) 前掲『朝日村史』89頁
- 4) 前掲『朝日村史』86頁
- 5) 三浦孝美・仁科英明『東天竜 300 年史』（中央企画、1991）3頁
- 6) 高井宗雄『樋口村水利関係史料』（宮澤印刷、1997）参照
- 7) 前掲『樋口村水利関係史料』
- 8) 平出区誌刊行委員会『平出区誌』（平出区誌刊行委員会、1993）159・160頁参照
- 9) 辰野町誌編纂特別委員会『辰野町誌 自然編』（辰野町誌編纂特別委員会 辰野町誌刊行委員会、1989）
- 10) 辰野町誌編纂特別委員会『辰野町誌 自然編』（辰野町誌編纂特別委員会 辰野町誌刊行委員会、1989）

11) 「東井筋幅切広底堀等普請図面」（樋口区 高井宗雄氏所蔵）

12) 辰野町誌編纂専門委員会（『辰野町誌 自然編』辰野町誌刊行委員会、1989）242-243頁、平出区誌刊行委員会『平出区誌』（平出区誌刊行委員会、1993）159-160頁参照

13) 御免定写儲帳（辰野著町編纂資料室所蔵）参照

【参考文献】

- ・渡辺兵力『農村集落論』（龍溪書舎、1978）
- ・辰野町誌編纂特別委員会『辰野町誌 自然編』（辰野町誌編纂特別委員会 辰野町誌刊行委員会、1989）
- ・『辰野町誌 近代編』（辰野町誌編纂専門委員会 辰野町誌刊行委員会、1989）
- ・長谷川正次『高遠藩の基礎的研究』国書刊行会、1985）
- ・畑林真之・土本俊和「近世松本城下町における都市の原形—水系と町割から見た都市の域の形成過程—」（『日本建築学会計画系論文集』438、221-230頁、1996）
- ・渡部一二「大地に刻印された水路」（『水路の用と美 農業用水路の多目的機能』山海堂、2002）2頁参照
- ・土本俊和「水系と町割」（同『中近世都市形態史論』中央公論美術出版、101-110頁、2003）